

大学トップアスリーートのキャリア意識に関する研究
～大学サッカーに注目して～
A study of Research on Career Consciousness in Elite university athletes
A case of university Football Players

1K07B041-6 小川 諒
指導教員 主査 間野義之 先生 副査 堀野博幸 先生

【目的】

JSLの時代からJリーグに移行し、完全なるプロフェッショナル化した日本のサッカーでは、毎年多くのプロ選手を誕生させる一方、ほぼ同数の選手が引退の道を選ぶことになる。その多くはサッカーと一生関わる仕事を希望するが、その夢を叶えられるのはごく一部の選手に限られている。その他の選手はサッカーとは違う職業に就くわけであるが、戦力外通告を受けてから考えても遅い。そのため現役中にしっかりとキャリア意識を持っておく必要があり、且つ、大卒選手は在学中にセカンドキャリアなどについてしっかりと考える時間もあり、環境も整っている。

大学にサッカーをするために入学してくる選手は多いものの、プロの道に進むことができるのはほんの一握りの選手に限る。多くの選手は一般企業に勤めるなど次の道に進むわけであるが、プロに進むにしろ、就職するにしろ、大学の4年間を経験することでその選手のキャリアにどのような影響を与えるのか、大学によってどのようなキャリアプランに関する傾向があるかなどを明らかにし、大学サッカーの重要性を意味づけることを目的とし、大学サッカー・大学スポーツが今後より発展するよう提言する。

【方法】

研究目的を達成するために以下の二つの方法で行った。

1. データ集計

X大学リーグに所属している12チームのチームデータをX大学リーグのホームページ、各大学のホームページから集め、Excelに入力し、グラフ・図の作成。そのデータをSPSSのクラスター分析によって4つのグループに分類し、各グループの中から1大学ずつにアンケート調査を依頼した。

2. アンケート調査

アンケート調査の許可をいただいた4大学の男子体育会サッカー部員に対し、質問紙によるアンケート調査を行った。アンケートは2010年X大学リーグに登録されている選手に対してのみ実施した。大学に入学した理由や、将来のキャリアプランについての質問や、将来に対する不安など5段階で回答をしていただいた。そのアンケート結果をSPSSを使いカイ二乗分析を行った。

【結果】

アンケート結果から多くの選手は大学にプロになるため、高校時代にプロになれなかったから入学してくることがわかった。そして所属大学への入学理由としては、プロになるためが多く、次に大学のネームバリューが多かった。1年から3年までプロ志望の選手が多く、プロを意識している選手が多かったものの、3年から4年にかけての時期に多くの選手がプロ志望から就職志望へと希望進路の変更を行っている。この時期は就職活動が行われるため、選手の中での現役続行か就職かのターニングポイントとなっていることがわかった。

多くの選手が就職の道を選択する中、現役続行を決めた、あるいは希望する選手に対してセカンドキャリアの獲得に不安があるかを5段階で質問したところ、半分以上の選手がセカンドキャリアに不安がある、少し不安があると答えた。実際にセカンドキャリア獲得に向けて、多くの選手教員免許の取得を目指していることがわかった。しかし、教員免許取得予定の選手のほとんどが体育学部・スポーツ科学部を設置している大学の選手であることがわかった。希望進路決定に影響を与えた要因について同期。先輩の存在をあげている選手が多かった。

一方、就職を決めた選手はメーカー、商社、テレビ、広告、公務員とさまざまな業種に進んでいく。大学サッカー経験者は卒業し多くのフィールドで活躍することがわかった。

【考察】

所属大学を選択した理由にネームバリューが多かったのは、プロに進むにしろ、就職するにしろ、キャリア選択において少なからずネームバリューがあるほうが有利に働くのではないかと考えられる。1年から3年と4年との間で、就職志望の人数に優位差が見られた。それは周囲が就職活動などをはじめすることで、多くの選手がこの時期にプロ志望に対しての「見切り」をつけるのではないかと推測される。

セカンドキャリアに対する不安がある選手が半分以上いるという結果があり、大学サッカーや各大学として、セカンドキャリアの獲得に向けてのアプローチが必要なのではないかと考える。大学の体育会では文武両道を目指さなくてはならないし、その中の一環としてセカンドキャリアに向けての取り組みを行う必要があり、それが大学サッカーを経験することの意義であると考え。そして、希望進路にスポーツ関係で働きたいと思う選手がおらず、スポーツ経験者がスポーツを支える立場にならなくてはいけないと考える。